

<エッセイ>不思議に思う対照的な日本人：親切さと不親切さ

著者	ヴォロビヨワ ガリーナ
雑誌名	日文研
巻	61
ページ	20-25
発行年	2018-10-31
URL	http://doi.org/10.15055/00007025

<エッセイ>不思議に思う対照的な日本人：親切さと不親切さ

著者	ヴォロビヨワ ガリーナ
雑誌名	日文研
巻	61
ページ	20-25
発行年	2018-10-31
URL	http://doi.org/10.15055/00007025

不思議に思う対照的な日本人…親切さと不親切さ

ガリーナ・ヴォロビヨワ

外国の中では、私にとって日本こそが素晴らしく、住みやすい、好きな国である。その理由は、私は日本語が分かるので人々とのコミュニケーションに問題がないこと、また、尊敬に値する日本人の性質、例えば責任感、親切さ、礼儀正しき等が挙げられる。しかし、日本文化には私が不思議に思う対照的な面もあり、ここでは日本人の親切さと不親切さについて述べたいと思う。

日本人の親切さ

日本人の知り合いはとても親切に接してくれるのでありがたく思っている。それは研究活動の支援にとどまらず、例えば日本の名所や見どころの案内など多岐にわたり、楽しい思い出となっているのだが、知り合いでもない全く見知らずの人が親切にしてくれたことが何度もあり、感動したことが度々あった。

例えば、友達と日光に行ったときのことであるが、道に迷ってしまい、通りがかった家の庭にいた日本人に事情を説明したところ、その人が自分の車を出して送ってくれたということがあった。また、空港で偶然出会った日本人のご夫婦のお宅に泊めていただいたこともある。このご夫婦は元教師で定年され、私が日本語教師だと言うと、同じ教師だということでお宅に招

待してくれただけでなく、多くの見どころまで案内してくれたのであった。それらのエピソードは一生忘れないであろう出来事となり、私は今でも感謝の気持ちでいっぱいである。

ここで、ある一日に起こった三つのエピソードを紹介したいと思う。ある日、私は新幹線に乗って東京に向かっていたのだが、窓側に座っていた女性に話しかけてみた。「この窓から富士山が見えるそうですね」。女性は明るく、「窓際の席を譲りましょうか」と言ってくれた。私は最初は断ったが、その後は感謝して席を交代してもらい、カメラを準備した。そのときちょうど通りかかった車掌に、その女性が富士山はいつ見えるのかと尋ねてくれ、車掌は時刻表を見て時間を教えてくれた。残念ながら、通過するとき富士山は雲に包まれて見えなかったのだが、おかげで私と女性は楽しくおしゃべりができた。しばらくすると、再び車掌がやって来て、曇天のせいで私達が聖なる山を見ることができなかったことを謝ったのである。彼には何の責任もない自然現象のせいだったにもかかわらず、である。実に心の温まる出来事であった。

次に起こったエピソードは、新幹線で東京駅に到着したときのことである。在来線に乗り換えるとき、私は持っていた乗車券のどれを機械に挿入するべきかを駅員に尋ね、教えられて無事に改札口を出たのだが、ちょっと歩くと誰か私を追いかけてくるような足音が聞こえて声をかけられた。「お客さん、これからの行き方をご存じですか。説明しましょうか」。先ほどの駅員が、私が目的の駅までの道順が分からないのではないかと心配して追いかけてきてくれたのである。私は幸い道は分かっていたのだが、とても嬉しくなる出来事であった。

そして、その日の楽しい出来事はまだ終わっていないかった。目的の駅に到着し、パン屋さんに寄った。入り口には「今日は全品半額」と書いてあった。私はパンを選んで店員にお金を支払った。パンの値段をはっきり覚えていなかったが、半額ではなく全額払ったように感じた。

特段気にせず、私が広告の意味がはっきり分からなかったのだろうぐらいに思った。そして、領収書をもらわずにパン屋さんを出て暗い道を歩いていくと、またすぐに私を追いかけて走ってくる足音が聞こえた。振り返るとパン屋さんの店員で、私に追いつくと彼はこう言った。「お客さん、あなたは領収書を忘れしました。私はその裏にスタンプを押して、あなたが支払った金額の半分を書き込みました。もし数日中にまた当店に来てくださったら、その領収書をお金の代わりに使ってパンを買うことができますよ」。

本当に幸福な日だった。私はその一日でこのような親切的な日本人に出会ったのである。一見するとそれぞれの出来事は些細なことかもしれないが、私にとっては仕事中の日本人の礼儀正しき、親切さがよく分かった出来事であり、尊敬に値する振る舞いの例であった。このような人々が日本の富と繁栄をもたらしたのだろうと考えている。

日本人の不親切さ

一方で、私は日本でなかなか理解しがたい、不思議に思う不親切な出来事にぶつかった経験もあった。日本では電車やバスで席を譲る光景があまり見られず、私は初めて日本に来たときは驚いたものである。

ある日の電車では空席がなく、私はずっと一人の男性の前に立っていたのだが、彼は足を広げて座り、隣の席にはかばんを置いて三つの席を占めていた。私は、自分の国の習慣と異なり男性が女性に席を譲らないことにも驚いた。「席を譲りなさい」と言われれば譲るのかもしれないが、自分から積極的には動かないのだなと不思議に思った。

もっと驚いたのは、電車の中で左手で赤ちゃんを抱いて右手で小さい子供の手を握って立つ

若い母親の前に、七人の若い男女が平気で座っていたことであつた。誰も彼女と子供達を気にしていなかつた。私は、全世界でも文化や伝統を重んじ、親切で礼儀正しいことで名高い国であるはずの日本で、どうして電車やバスの中ではこのようにお互いが無関心でいられるのかと考へていた。知り合いの日本人に聞いたこともあるが、「以前は譲っていたが、少しずつ習慣が変わってきた」「お年寄りには弱く思われることが嫌いなようで、誰かが席を譲ろうとしても座らないことがある」という答えが返ってくるだけであつた。

私と同じ国の知人女性が日本に到着して間もない頃、電車の中でおばあさんに席を譲ろうとしたところ、おばあさんは「私はまだ立つことができます」と素っ気なく答へて断つた。知人女性はショックを受けて別の車両に逃げてしまつたそうである。一方、別の日本人ではない知人女性は電車でおばあさんに席を譲つたところ、「こんなことをしてもらつたことが今までなかった」ととても感謝され、リングをくれたそうである。私も日本の電車やバスで何回もお年寄りや子供連れの母親に席を譲つたが、その際、たいていの場合は最初は遠慮して断られるが、後から「本当に座ってもいいですか」と感謝して座るといふ日本人が多かつた。

ある日、私は満員電車に乗って立っていた。隣には七十代ぐらいのおばあさんが立っていた。私達の前には二人の若い女性が座っていたのだが、しばらくすると二人は同時に電車を降りていき、おばあさんと私が隣同士で座ることができた。日本人は通常、電車の中で見知らぬ人に声をかけることはないようだが、おばあさんはずっと立っていて疲れていたのが座れたことでほっとしたようで、「座れてよかった」と私に話しかけてくれた。私は若い女性達ももっと早く彼女に席を譲ればよかったのにと答へたのだが、それに対するおばあさんの答えは私を驚かせた。「私はもう仕事をしていないから役に立たないです。それに対して若い人達は仕事

をしているので疲れているだろうし休息する必要があるのでしよう。もし誰か私に席を譲ってくれたらありがたいですが、譲ってくれなくても怒りません」。私は「でも彼女達にも母親がいるでしょう。もし彼女達があなたに席を譲ったら、自分達の母親にも誰かが席を譲ってくれるのだと考えて行動するべきだと思います」と言ってみましたが、おばあさんは同意してくれなかった。

またある日、私は日本人の先生方と、一〇か国からなる日本語教師のグループの一員として日本の高等学校を訪問した。数人の先生は自国の民族衣装を着ていた。電車とバスを乗り継ぎ、水田の中を歩いてやっと学校に着いた。学校で私達は授業を見学し、その後、日本の武道、踊り、生け花、茶道などのレッスンも見せてもらった。それから私達は高校生に自分の国の話をして質問に答えたり、意見交換をしたりして交流を楽しんだ。訪問が終わって私達がバス停に向かうと、そこには既に先ほど交流した高校生達がいた。バスが来ると彼らは先にバスに乗って空席に座り、残りの空席に自分のかばんを置いた。私達日本語教師は立って乗るしかなかった。先ほど学校で楽しく交流したばかりなのに、その態度に非常に驚いた。学校では茶道など、日本の伝統を教わっているのに、お年寄りや客人、先生に対する敬意や思いやりの心が育成されていないのだろうかと残念に思った。別の時には、お年寄りが座ろうとした席を、素早い子供や若者が横取りしてしまうところも何回も見た。

ある日、私を含めた女性六人で、ある研究会からの帰りに一緒に電車に乗ることがあった。私達の中には白髪の年を取った先生もいた。彼女は研究会の実行委員として一日中頑張っていたので、「疲れた、足が痛い」と言っていた。電車に乗ると一つの空席があった。私は大きい声で「先生、どうぞ座ってください」と言ったのだが、それが聞こえていたはずの若い女性が先に座ってしまい、私達六人の前で化粧直しを始めたのである。その時のなんともいえない気

持ちほうまく言葉で表現できないが、日本人の先生方が黙っていたので、私も「郷に入らば郷に従え」という諺を思い出して何も言わなかった。

私はこのような状況を改善することはそんなに困難ではないだろうと思う。子供と若者に、家庭や学校でそういった教育をすればよいのである。

私はある日本の大学で講演をして、その後、学生達と交流する機会があった。一人の学生が私に、日本にいてカルチャーショックを経験していかないかと質問してきたので、「私の国では、お年寄り、身体障害者、子供連れの両親と女性に席を譲る習慣があります。そして同年代の少女にも少年が席を譲ります」と答えた。そして、「私は「姥捨て」という風習について描かれた日本の映画を思い出しました。昔々、ある日本の村では弱くなって家族に役に立たなくなった老人達を特定の山に連れて行って捨ててしまい、老人達は飢えと寒さのために死んでしまったそうです。電車やバスでのお年寄りへの無関心な態度は「姥捨て」に似ていると思います」と付け加えた。質問した学生は立ち上がり、「私はこれからお年寄りにも少女にも席を譲ります」と言ってくれた。

私は、またいつか日本に行くチャンスがあれば、お年寄りや子供連れの親、女性に席を譲る親切的な日本を見たいと思っている。

(ピシケク人文大学准教授／国際日本文化研究センター元外来研究員)